

平成27年度第3回
日野市総合教育会議

議事録

日野市企画部企画調整課

平成27年度第3回日野市総合教育会議議事録

日 時 平成27年12月2日 18時30分～20時30分

場 所 庁議室

出席者 大坪市長、西田教育委員長、高木教育委員長職務代理者、岡本教育委員、
濱屋教育委員、米田教育長
小貫明星大学教授、梅澤横浜国立大学准教授
事務局＝大島企画部長、松本教育部長、田倉教育部参事、記野教育部参事
徳田まちづくり部参事、赤久保健康福祉部長、池田子ども部長
仁賀田企画調整課長、兼子庶務課長
田中企画調整課副主幹、三好庶務課係長、小出席務課主任

議 事

(1) 開会あいさつ(市長)

(2) 議 題

議題第4号 日野市総合教育大綱について(資料No1)

1 大綱に掲げる項目(テーマ)等について(意見交換)

①「包み込むモデル」について 明星大学教授 小貫 悟氏

②「運動世界」について 横浜国立大学准教授 梅澤 秋久氏

2 今後について

(3) その他

(議事の要旨)

開始 18時30分

○仁賀田企画調整課長 それでは、おそろいですので「平成27年度第3回日野市総合教育会議」を始めさせていただきます。

総合教育会議は市長が招集する会議となっております。議事進行は市長にお願い申し上げます。よろしくお願いいたします。

○大坪市長 皆様、こんばんは。遅い時間帯に大変ありがとうございます。

ただいまから「平成27年度第3回日野市総合教育会議」を開会いたします。

会議に入ります前に、説明員の紹介を事務局よりお願いいたします。

○仁賀田企画調整課長 今回、初めて参加になった職員を紹介いたします。

まちづくり部文化芸術スポーツ担当参事徳田でございます。

○徳田まちづくり部参事 徳田です。よろしくお願いいたします。

○仁賀田企画調整課長 以上でございます。

○大坪市長 本日は、傍聴希望者がいらっしゃいますので、傍聴を許可したいと思いますが、御異議ございませんか。

(「異議なし」と声あり)

○大坪市長 異議なしと認め、傍聴を許可します。

(傍聴者入室)

○仁賀田企画調整課長 それでは、開会の挨拶を市長によりしくお願いいたします。

○大坪市長 では、次第に従い、開会に当たって一言挨拶をさせていただきます。

本日は大変お忙しい中、第3回の総合教育会議に御出席をいただきましてありがとうございます。

これまでの2回の会議においては、教育の大綱に係る意見をいろいろな角度からいただけてまいりました。その中で市長部局側からも教育に関する考えも出させていたいただけたところがございます。そんな中で活発な議論をこれまでさせていただけてまいりました。視点の違いが幾つかありましたが、目指す方向にそんなにそごはなかったかと思っております。これまでの会議で出た意見にさらに肉づけをして、日野らしい、日野市ならではの教育の大綱をつくっていかうということで、これまで進めてまいりました。

しかし、テーマによっては広く総合教育会議のメンバー以外の方の意見を聞くことで、内容を深められるとの御意見もいただいたところがございます。総合教育会議について規定した地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4の5項では、関係者または学識経験を有する者から協議すべき事項に関し、意見を聞くことができるとされております。そんな経緯で、日野市や日野市の学校のことをよく御存じの明星大学の小貫教授と横浜国立大学の梅澤准教授から御意見を伺って、意見交換の機会を設けることとして今回の会議となった次第でございます。

先生方には、これまでも深く日野にかかわっていただいております。総合教育会議

で大綱に掲げたテーマに関連してお話をいただきたいという要請を快くお引き受けいただきまして、本当にありがとうございます。お二人の先生からいただく識見を生かして、日野市らしいすぐれた教育の大綱の策定に向けて、一歩も二歩も前進できることを願って、簡単ではございますが、私からの挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いたします。

それでは、次第に従って、本日の議題に入ります。

「議題第4号 日野市総合教育大綱の策定について」ということで、事務局よりお願いたします。

○仁賀田企画調整課長 それでは「議案第4号 日野市総合教育大綱の策定について」を御説明申し上げます。

本日は、総合教育大綱の策定に向け、日野市にもゆかりの深い学識者の方をお招きし、意見交換を行います。まず、先生方からテーマに基づく御講演をいただき、その後、意見交換を行いたいと思いますので、よろしく御了解願います。

本日、お招きいたしました先生方を御紹介いたします。

明星大学人文学部教授小貫悟先生でございます。

○小貫悟氏 小貫です。よろしくお願いいたします。

○仁賀田企画調整課長 続きまして、横浜国立大学教育人間科学部准教授梅澤秋久先生でございます。

○梅澤秋久氏 よろしくお願いたします。

○大坪市長 さらにもう一人の傍聴希望者が今いらっしゃいましたので、傍聴を許可したいと思いますが、御異議ございませんか。

(「異議なし」と声あり)

○大坪市長 では、お願いたします。

(傍聴者入室)

○仁賀田企画調整課長 それでは、小貫先生、よろしくお願いをいたします。

○小貫悟氏 皆さん、こんばんは。

この会議に呼んでいただいて、発言のチャンスを得たということ、私自身は、特に日野市の特別支援教育のことで平成19年度に法令化されるに当たって、前倒しで日野市は特別支援教育に取り組みたいということの御依頼でしたので、多分、平成17年ということになりますので、ちょうどもう10年ぐらいろいろな形で、途切れることなくかかわらせていただいているということになります。

途中で2008年～2009年ぐらから包み込むモデルという言葉で、日野市の特別支援教育の方向性について提案させていただいたという経緯がありまして、このことをできるだけコンパクトにお話しさせていただきたいと思っております。

そもそもの理論背景ということなのですが、こんなところから入りたいと思うのは、保護者の方が障害を抱えているお子さん、障害を持っているお子さんの親御さんがいろいろな形で我々のところに相談に来られるわけですが、何を望んで来られるか。そうすると、少し思い切って言ってしまうと我が子の障害を軽くしたい。これが一番大

きな思いでいらっしやるわけです。障害を軽くしたい、軽減したい。ところが、この障害が軽くなったり、重くなったりするのだろうかという問題が非常に大きな問題であって、これまで専門家は、「お母さん、障害は軽くなったり、重くなったりするものではないのだよ。」「我が子の障害をしっかりと受けとめて育てていくのだよ。」などということをやったりしてきたのです。果たして本当にそうなのかという問題なのです。そうすると、そもそも障害というのは、どういうふうを考えなければいけないのかという整理から始めなければいけないというのが、日野市の包み込むモデルという背景になっています。

この内容は、いわゆる大学・大学院の何とか障害というとき必ず出てくるような図から始まるのですが、これはWHOが障害とは何かといったときに必ず説明で出てくる図なのです。

WHO、世界の基準は障害というものをプロセスで扱う。障害はプロセスであるという考え方をします。例えば何か大きなけがをしますといったときに腕を一本失うようなけががあった。これは形態の変化が起きますので形態上の変化と捉えるのです。腕がしていた機能がなくなりますから、これは機能障害という言い方をします。実は日本ではここで障害という言葉を使うのですが、WHOはこれを障害と言わないわけです。途中なのです。つまり、我が国は残念ながら障害という言葉が非常に分化されていないとか大ざっぱに使っています。お医者さんは腕を失うということになったら、大変残念ですけれども障害が残りますと言います。これは「impairment」という言葉が与えられているプロセスなわけです。

ところが、例えばそうすると、何かをつかむ能力を失うということになる。これは「disability」と言われているのです。Learning Disability、これはLDと言われるものです。学習障害です。例えば、読んだり書いたり非常に極端にできない子がいると、学校で障害があるのではないかという言葉を使うときがあります。これはプロセスなのです。ところがdisabilityに対しても、障害という言葉が割り当てられるしか日本語はないので障害と呼んでいます。どうなるかという、障害が完成するのはハンディキャップが起きてきたと考えられるのです。社会的不利と訳されています。日本は、場合によっては訳本なんかですとハンディキャップを障害と訳しているときがあります。これは何かぴんとこないと思って原書を読むと、ハンディキャップがもともとの言葉だったりするのです。

こんなふうにプロセスで考えましょうという流れの中で、実は障害というのはいろいろ考えさせられることがあって、例えば私は眼鏡を使っているのですけれども、この間、健康診断があったばかりなのですが、眼鏡を外すともう0.1も見えないのですから、測定できませんでした。結果が出ましたけれども0.1以下と書いてあるわけです。それでは眼鏡をつくれないので、眼鏡屋さんへ行くと0.01とか、毎回落ちていくのがっかりするのですけれども、これほど目が悪いのに私のことを視覚障害と言う人は誰もいないのです。明らかに機能上の問題を抱えているのですけれども、なぜ視覚障害と言われぬかということ、簡単に言うとこの世に眼鏡があるからなので

す。つまり、眼鏡があることによって私はハンディキャップを負っていない。完成していないわけです。

これもナンセンスですけれども、私が眼鏡のない世界を生きなければいけないとなったら恐らく障害者です。ぱっとイメージできることで言うと、眼鏡がない世界ですとほとんど見えていませんから、多分運転させてもらえないのではないかな。そうすると、私の人生、生活の中に不利が若干起きてくる。こんな形で考えると実は障害というものをどうすれば完成させないでいけるかという意味合いでの障害の軽減ということがあり得るわけです。

一生懸命私や現場の先生方、教育委員会の方々が発達障害の子たちに何をやろうとしているかということと不利が起きないように、変な言い方ですけれども、完成度の低い障害の状態をできるだけつくっていけないか、あるいは本人の力でそういうふうにはできないかということ育てていくということを考えるわけです。

こういう視点だけでも、日本ではまだ新しく感じられる方がいらっしゃるわけですが、このモデルの発表がよく見ると1980年、WHOがここでとどまっているわけがありませんというわけで、実はもう新しいICFというモデルです。これは特別支援学校の先生方なんかは大体研修会で聞かされる話なのです。すごくシンプルにしました。同じ論理なのですが「生活機能」という言葉を使うのですが「参加」「活動」「心身機能・構造」の3点の部分に制限がかかった状態、ハンディキャップという概念を少し吸収したのです。参加に制限がかかっている人生、どこかに行きたい、どこかで参加したい、役割を発揮したいと思うのだけれども、そこに制限がかかっている状態。あるいは活動したいことに制限がかかっている状態、そして、体の機能に制限がかかっている状態といった部分が障害の中核となるという話なのです。

随分すっきりさせてしまったのですけれども、前のモデルというのは、なぜ捨てられてしまったかということと評判が悪いところがあったのです。何かというと、この矢印の方向がけがをしたり、病気をしたら、あとはどうやって不利にならないのかみたいな、必死で食いとめるみたいな、土木作業みたいなものです。どこで食いとめるか、宿命論的モデルみたいな言い方をされて、この考え方は何か元気にならないではないか。

ICFモデルでは、実はここが売りで、両矢印ですから相互作用モデルと言われてます。つまり、この方の参加できる場所をふやすということが、参加に制限がかかって低減していくと、結果、活動するということの制限が少なくなる。活動できるということがふえていく。この人がいろいろ活動できるよう、活動に制限がかからなくなっていくと参加できる場がふえていく。どちらかが動くと両方影響し合うという考え方なのです。

そうすると、実はすごく気になることがあるのです。何かというと、私の専門の障害のある子のことを指して、障害のある子の活動を挙げていくと心身機能に変化が起きていくかどうか。実は冒頭、親御さんのこんな願いが相談の中で語られるといったことの中に、今、不利を減らしていけばいいのではないかなという言い方をしました。

でも、親御さんが言っていることというのはもっとダイレクトなことで、例えば発達障害の原因は中枢神経系の機能障害を推定しているわけです。脳に変化が起きないのかという話、中枢神経系に変化が起きないのかということをおっしゃっているのです。WHOのICFモデルでは「起きます」と言っているのです。私らは専門家として、「お母さん、そんなことが起きるわけがないでしょう。」、「運命なのだから受け入れなさい。」と言ってきましたけれども、「起きますよ。」が世界基準なのです。

言葉を誤解することが起きないように説明するのは難しゅうございますけれども、実は廃用症候群という言葉をご存じでしょうか。マスコミでは生活不活発病と言いますが、これはどこで世間的に話題になったかということと中越の震災です。今回の大きな震災より一つ前の震災のときの例の山古志村のおじいちゃん、おばあちゃんのことです。仮設住宅に入られた老人がたくさんいらっしゃるのです。そのときに認知症の増加という問題が起きたのです。つまり、今まで畑仕事をやったり、台所仕事をやったりしていたおじいちゃん、おばあちゃんたちは仮設住宅が狭いので、活動に制限が起きたときに、脳機能の低下という問題が起きてしまったのです。

我々はこの事実を知っているのです、今回の東北の震災のときに大変専門家は気になるところで、南三陸町の悉皆調査でわかったことは歩けない老人が急増、つまり、今見てもあれだけ広いところを老人が歩いたり、行ったり来たりしていたはずなのです。ところが、山合いの高いところに仮設住宅をつくらなければいけないとなったときに、当然使わないと衰えてくるという問題が起きてくるわけです。

ここの矢印の近くにリハビリテーションという言葉もあります。少し専門家が言うような例ではないのですが、長嶋監督が倒れたときのことを皆さん覚えていらっしゃるよ。長嶋監督が倒れたときもすごく重い状態で、二度と我々はあの長嶋さんと会えないのではないかと勝手に思い込んでしまったわけですが、長嶋さんがすごいのは明らかにテレビに出てくるたびに状態がよくなっていますよ。物すごいリハビリを多分されているのだと思います。そうするとあれだけの変化が起きてくる。リハビリテーションというのはこの原理に支えられております。

長嶋さんの脳は70歳なのです。我々の目の前にいるのは生物学的に非常に若いものですので、ここは変化が起き得るといのがグローバルスタンダードなわけですが、ここで非常に難しい問題が起きてきます。実はこのことを例えば商業ベースに乗せて、本当かどうかわからないエビデンスのないサプリメントなんか売られられて、親の気持ち、思いにつけ込むようなことが時々起こるので、このことは専門家としては非常に言いにくい。ところが、ないということではない。そうすると、ここのことはまだまだこれから医学の変化や、さまざまなことが発展していかなければ、ある種の結論が出ないわけです。

そうすると、今、目の前にいる子供たちに対してどうするかということになると、「活動できる。」、「活動の制限をできるだけ減らしたい。」、「参加できる場所をできるだけふやしていこう。」この部分だったら今すぐ我々がイメージできるものなのです。これが実は包み込むモデルの背景になっている。この子供たちの状況、活動で

きる状況、参加できる状況をいかに確保していくかという話になってきます。

でも、簡単な視点だから、どこから切り崩しても相互作用モデルといったら参加を上げればいい、活動を上げればいいというのですけれども、実際に現場で、本気でそれをやると大変なことになって、もう少し指針が欲しいということになります。

背景因子というものが、この子の個人の変化を促すか、環境の変化を促すしかない。この2つの特徴がまたすてきなことに、水の流れのように相互作用モデルによってつながっているのです。

伝統的な特別支援教育は障害がある子に何ができるか、どんどんやれることをふやしていく。どんどんできるようにしていかなければいけないとやってきたわけですが、日野スタンダードはこちらもきちっとやりながら、環境を整えていくという話になっております。ここで包み込むモデルがここで登場するということです。

真ん中のこの子に仮に障害があったときに一番近くで包み込んでいるのは個別的配慮、この子に一番適切な配慮で包み込もうという話なのです。実は特別支援教育の専門家、自分自身の反省も含めてなのですけれども、いろいろなときに発信してきたときにこんなふうにといい、いろいろなことを注文したり、説明したりしていました。そのときそのときで当然先生方はなるほどと思うわけですが、ちょっと待って、だって、私のクラスはこの子だけではないのですよ。30人いるのに、この子のためだけにその時間をどうやってつくればいいのかという話になってしまう。ところが、よく考えてみると個別的配慮というのは、この先生方はクラス全体の配慮の一部です。つまり、全体に対する指導方法が安定的であれば個別的な配慮も安定していく。

先生方一人一人の指導の力が生かされるためには、学級環境の安定が非常に大事になってきます。学級環境の安定はどこが包み込んでいるかという学校環境が包み込んでいる。支えている。学校環境の安定は日野市、地域が抱えている。外枠が崩れれば中はどういうふうに頑張ってもなかなか立て直せないという状況、こんなふうに多層構造になっているのではないかという話なのです。

配らせていただいた資料の裏を見ていただくと、それが日野スタンダードということで、少しあちこちで話題になっているようなものなのですが、その表の中身は見られなくて結構ですけれども、見えにくい小さい図ですが、左側から「学校環境」「学級環境」「指導方法」「個別的配慮」という形で並んでいますので、このイメージ図がないとチェックリストの意味がよくわからない。この部分でどんなことをすれば、この包み込む環境が安定的になるのか、他市、他区は知らないけれども、日野ではこれを当たり前にしなすという項目を出したのが日野スタンダードということで、日野市の先生方はこれを一つの指針になさって環境づくりをしている。各学校によっては学校環境を安定させていくところから入ったほうが早い。今、本校は学級環境の安定が先だといろいろ違うわけですけれども、一つのミニマムスタンダードのようなものがそこに示されたものだということになっています。

これは包み込むモデルという言葉を使っていますけれども、実は2010年に、多分日本で初めての本ではないかと思えます。東京都日野市公立小中学校全教師、教育委員

会With小貫悟という、Withでくっつけ足していただいたというありがたいものですが、この本を出したときに包み込むモデルで各章をつくって、日野での実践、日野では実際にこんなふうに行っていますということを出しました。

包み込むモデルの背景はインクルーシブ教育で、これは2014年ですから去年の1月に障害者に関する国際条約の批准がありました。これで日本はインクルージョン社会の実現というところに国の方針として一気にカジを切る。

この中でインクルーシブ教育システム、今までは何か理念のように言われていたことが本当にやろうということになりました。インクルーシブ教育という言葉、日野市の先生方の皆さんは余り聞いてこられてなかったのですが、実は包み込むモデル、包み込む、インクルーシブです。そのまま訳したものです。カタカナや英語となると何かニュアンスがつかみにくいところを普通に日本語に訳したら、日野市の先生方は非常に御自身のスタンスとじっくりこられて、包み込むモデルを少し下敷きにやっついこうかという話になったということです。

そういうことで、参加を支えるいろいろなことに取り組んできた本なのですが、実は授業という視点の中で今、新しい展開をしています。

参加できるようになったけれども、授業がわかるようにしたプロジェクトではなかったのです。これはもしかすると、子供にとってはむしろ苦痛をふやしたのではないかと。授業に参加はさせられているけれどもわからない。朝から夕方までずっとわからない。でも、参加はさせられている。参加を支えた以上はわかる授業、できる授業で進めていかなければいけないだろうということで、日野スタンダードセカンドステージというチャレンジが3年前から始まって、これが文科省に大変注目していただいて、ことしは大きな金額の研究委嘱を受けているというのは、この次のテーマにという話です。

それがこういった理論図になりますけれども、こういうことをベースにした実験をしながら、ことしは25校全ての小中学校で研究授業を1回ずつ行うということで、どこもいろいろとお忙しい中だとは思いますが、研究授業という形で熱意を持ってくださっているということでは、結果が出るのではないかとということで、いつかまた御報告する機会を与えていただければと思います。

以上です。（拍手）

○仁賀田企画調整課長 小貫先生、どうもありがとうございました。

次に梅澤先生、お願いします。

○梅澤秋久氏 改めましてこんばんは。横浜国立大学の梅澤と申します。

私は昨年度、一昨年度から日野市の小学校のほうにお邪魔をしまして、昨年度、非常に大きな日野の体育にかかわる研究のプロジェクトに参加をさせていただきました。そして、今年度も最初は日野の体力向上のプロジェクトという形で御依頼を頂戴したのですが、ちょっとわがままを言いまして体力向上では嫌ですという形で、ちょっと違った方向でプロジェクトにかかわりを持たせていただきました。それについて、これからちょっとお話をしていきたいと思っております。

突然ですが、私は必ず授業を質問からスタートしているのですけれども「日本（東京）の中学生の体力は、他のアジア諸国と比べて高いでしょうか、低いでしょうか」。というちょっと抽象的なので具体的にします。この青い文字で書かれた8都市の中で東京の持久力に限定しましょう。健康関連体力の持久力は何位でしょうか。これはもう客観的な順位が出ているのです。皆さん、聞かれたら困るという顔をしていますね。皆さん、立場的にすごく上の方たちばかりなので、ここで答えを先に言ってしまう。振られて違ったら困るというオーラを感じていますので。ちなみに今年度の国際比較なのですが、順天堂の鈴木先生が出された研究結果です。

ごらんください。一番右側なのです。男子は青、女子は赤、ともに1位なのです。ちょっと想定外ではないですか。明らかに1位なのです。鈴木先生の考察では、恐らく運動部活動の影響が大きいであろうという考察がなされていきました。運動部活動は2年前ですと大阪のいわゆる体罰の事件が非常に問題になっていきましたが、やはり広く子供たちに学校の施設を使って運動を継続させる。これは世界的に余りないシステムなのです。これが非常に功を奏しているのではないかという結果が出されていきました。

実は以前、この日野の大綱案を頂戴しまして、オリンピック・パラリンピックという文言が入っていました。それに関連してスポーツ庁というのが10月に発足、設置をされたのですが、それによって変わるもの、あるいは変わりそうなものをここで挙げたいと思います。

1つはもう変わったものです。全教科の中で体育あるいは保健体育の事務がスポーツ庁に移りました。それ以外は全て初等中等教育局にあるのですが、体育のみ出てしまったのです。教科調査官、あるいはこれから学習指導要領の改定時期に入りますが、その委員も全て外局に出ました。

私はちょっと心配をしています。何が心配かというと、1つはスポーツ振興に向けた教科体育に移行してしまうのではないか。スポーツ庁をやろうやろうと実は20年ぐらい前から言っていたのですが、なかなかできなかったのです。でも、このオリ・パラの話が出てから一気に加速をしました。そして、御存じのとおり、2013年にスポーツ振興法が法案化されてから一気に加速しました。スポーツ振興法に基づくとすると、そこに書いてある競技力の向上であるとか、できるようにさせるということが非常に多くうたわれているのです。

一方で、大綱案の6番目に書いてあります「スポーツを『する』『観る』『支える』」といういわゆるスポーツを文化的な扱いとするという文言も入っています。しかし、全ての子供たちに対して、技能傾斜がすごく進んでしまうのではないかというのが私はかなり心配しています。

また、もう一つ心配なことが数値的にあらわれる体力向上に向けた取り組みの強化がなされるのではないか。これは言ってしまう。一番これに過敏に反応したのは東京都です。御存じのとおり、学力調査も体力テストも悉皆調査なのです。悉皆調査になって全国の数値を北は北海道から順番に並べていくのですが、メディアはそれを

見事に上から順番に並びかえて出してくれるのです。東京は2012年あたりですごく下のほうだったのです。44だか45で、それに当時の都知事はすごく怒りまして、これを何とか平均値まで上げなさい。相対的に真ん中まで上げなさいという目標、あるいはそういう要請を教育委員会以下にしたのです。私はそれに対してすごく批判をしました。これは論文上でもしています。

なぜ、平均値を上げることがよくないのかというところなのです。これは平均値あるいは相対的な位置を気にするというのは、大人とかリーダーの論理なのです。その裏にあるのは多分プライドとか、何でうちの地区はこんなに低いのだという考えからきているものだと考えます。これを上げろとなると大人はやらせる役、子供や部下はやらされる役で、正直な話、子供は平均を構成する組織の一部になってしまう。つまり歯車の一部、点数を上げるための道具になってしまう。極めて教育的ではないと私は感じています。これは社会学で言うところの工業型モデル、あるいは産業型モデルと訳されることもあります。今では支配型モデルと言われる場合もあります。

つまり、学習、LearningがTrainingになります。先ほど、長嶋監督がトレーニングをしているという話がありました。私はそのトレーニングはかなりポジティブに捉えるトレーニングかと思います。しかしながら、ここで言う子供たちが数値を上げるためのトレーニングはやらされている訓練、その訓練は極めて教育的ではないと私は思います。「意味わかんねえよ、先生」という形になります。「意味」と書いてありますが、これは哲学で言うところの意味を喪失してしまうということなのです。意味がわからない。

実は同じような内容、こういう工業型モデルは1960年代～70年代の学習指導要領で多くなされていました。ちなみに私が子供のころです。いわゆる我々は『積木くずし』の世代です。やらされるのが嫌だったのです。だから、大きく反抗しました。それが何の意味をなすのか、一切関係なく、そこの意味づけは「やらないと成績を下げるぞ。」で、当時は、その成績が将来に対して大きな意味を持っていた時代ではあったのです。

つまり、いい高校に入って、いい大学に入って、いい就職をすれば、一生涯平和であるというモデル、工業型社会、産業型社会という大きな物語が存在していたと、リオタールという学者が言っています。でも、今はそういう社会ではありません。つまり、これをさせることに子供たちが意味を見出せないのです。

この「『意味』を立ち上げる」ということを哲学的に考えてみるとこういうことなのです。「他のものが目に入らない」「『いま—ここ』の瞬間を生きている状態」で、意味が生成されている状態だと言われています。現象学でも同じようなことで使われています。平たく言うと夢中になっている状態はありますよね。時間を忘れて何かをする。いわゆる没頭している状態です。こういうふうになれる学習環境のデザインが今の教育学では求められている。先ほどの小貫先生の話にも環境が大事であるという話がありました。そういう環境の整備が今の教育には非常に重要になっている。そして、そこに参加をして、没頭して、夢中になるような活動がなされていけば、そこに

意味が立ち上がっているということになるのだろうと考えています。

よくよくいただいた教育大綱案を見させていただきますと、ビジョンのテーマに「豊かな環境が」とあるのです。ここで言う環境は多分自然がつくるような環境ではないと私は感じました。広い意味での環境が恐らく人づくりで非常に大きな影響を及ぼすのではないかと思いながら、私はこの案をすごくいい意味ですばらしいと思いながら拝見していました。

意味生成、あるいは没頭でもいいでしょう。その没頭の中で新たな私になっていく。それは没頭している学習対象の世界が広がっていくことにつながると思うのです。それを今の教育学では学びと呼んでいます。

つまりマイクロウェーブ、電子波というものは陶器、ガラスの器を通すのだよ、だから、電子レンジの中に入れると火がないのに、マイクロウェーブが中で反射をして、その中のものが温まるのだよとなると新たな世界が広がりますよね。そういう科学的事象が広がったような、新たな世界が広がったようなことなのかと考えます。私は体育教育が専門なので、それが運動の世界であるならば、それはそれで新たな運動の世界が広がっていくという現象になるのかと思います。

没入して、没頭して、もう本当に楽しくてしようがないような状態に他者の存在は欠かせないだろうと思います。ここでは、新たな私と世界だけなのです。でも、そこに他者は絶対必要だと考えます。

一つはその環境をデザインする大人です。多くの学校教育の場合は教師、包み込むモデルだと教師、学校の中の管理職であったり、それを支える教育委員会であったり、地域の方であったりというデザインをする大人が必要になる。

また、実際に没入しているところで、一人でやっても楽しいです。でも、もし「もうちょっとボールの横を蹴ってごらん、そうすると曲がるから」なんて蹴り方を習ってしまったりすると、キックが曲がると新たな世界が広がったりするのです。壁を蹴って進むでしょう、でも、水面から30センチぐらいが一番抵抗なく進めるのだよとアドバイスがあると、世界が変わるのです。今、前を向いて蹴伸びしているでしょう。水の抵抗が大きいから耳を入れてごらん。そうすると真っすぐになるでしょう。壁を蹴った後に進む量がふえるからね。本当なのかというほど進むのです。それだけで6メートルも7メートルも進むのです。水の中を進むというのはこんなことなのだ。誰か、他者が入ることによって大きく世界が広がります。そういう関係の中で人は学んでいくのかと思います。

皆さんにも、スポーツの中で生まれて初めてジャストミートした瞬間、あるいはここ一番の大会でヒットを打ったときの感触、今で言うと本田圭祐選手のまねをして、無回転キックが初めて決まった瞬間、バスケットボールでシュートを放った後、ブザーが鳴った後の得点は認められますから、それが入ったときの瞬間。今、この瞬間をいかにたくさんつくるか、それが運動世界を広げることだと私は思っています。これはトップ選手ではなくても味わえる。いわゆるフローの状態と言うのですが、感激できるような、そこがスローモーションで思い出せるような状態をたくさんの人

たち、これは子供だけでなく、生涯学習、生涯スポーツとして続けている人たちにも味わってもらいたいと思っています。

私が今フローを感じるならば、このスライドの運動と思ったのですけれども。ちょっと前にCMでやっていましたが、海の上で空を飛ぶで検索するとこれが出てくるのです。これは物があって、やりたいと思う私がいて、そこに空を飛ぶという現象、事が生まれる。でも、多分、私とこの物だけで事は生まれますが、そこにインストラクターがいたり、教えてくれる他者がいたり、映像を撮ってくれて、後からこうだったというフィードバックをしてくれる人や、あるいはそういうICTがあったりすると、その活動は大きく広がるかと私は思っています。私の中で多分やったことがないというのは、一番運動世界が広がるものかと思いつつながら、いつかはやってみたいと思っているものです。恐らく、こういうわくわくドキドキするような環境、物、事を上手に全ての学習者で、小学生であったり、あるいは大人に与えていくことがすごく大事かと思っています。

さて、先ほど支配型モデルというものがありませんでしたが、それに対峙する言葉として、協働型モデルというものがありません。今は知識基盤社会と言われていています。あらゆる新しい知識や情報を全ての活動の基盤とする社会、平たく言うと生涯学習社会なのですけれども、知識の使い方をちょっと変えましょうという社会になってきています。そういう社会においては、多様な他者とのコミュニケーションが求められると言われていています。ちょうど私の隣の先生が中央教育審議会の委員なのですが、ちょっと困ったよ梅澤さん、この学力3要素は大学教育にまで求められてきているということなのです。

大学教育で求められることの1つは「知識・技能」。

2つ目が「思考力・判断力・表現力」。

3つ目が「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」。

私、これは決して悪いことではないと思うのです。ただ、我々の体育の世界で言うところちょっと苦しくなります。一番上のわかるとできるがなかなか一致しにくい教科領域だからです。わかってできるのが一番望ましいのですが、数学はわかりやすいですよ。いわゆる公式がわかって、その公式にのっとなって計算ができる。非常にわかりやすいことなのです。しかしながら、我々の領域でいうとなかなか難しい。でも、何とかこれからかみ砕いて、中教審の審議の中でかみ砕かれたものが2018年ぐらいに出される新しい学習指導要領に入ってくるのかと今は感じています。

それは余談として、ここで申し上げたいのは大綱案で書かれている「かかわり」というワードや「学びあい」というキーワードと合致するということなのです。そして「多様な」というところが先ほどの小貫先生のお話にもあった、いわゆる障害のあるお子さんも、ないお子さんも、ある方もない方も、もっと言ってしまうと外国とのつながりがあるような子も、もちろん日本で生まれ育った人たちも、全てそういう多様な人々と協働して学んでいく必要があるだろうということなのです。

学習院大学の佐藤学先生、もと東大の先生ですけれども、自己、他者、対象との対

話的实践で学ぶこと。自分と他者と新しい対象との対話の中で進んでいくものが学びである。だから、学ぶことによって新しい自分がつくられる。新しい仲間関係がつくられる。そして、新しい世界が開けてくるというお話をしています。

また、日野ビジョンで「人・もの・こと」は関係論的学習という学習理論に基づいていると思われませんが、先ほど申し上げたとおり、このかかわりの中でおもしろいものが入ってきている。やらなければいけないことの中にちょっとものが入ったりすると人が興奮したり、恐らくここは双方向性、相互性モデルだと私は思うのです。全て左側の自己、他者、対象の全て総合モデルなのかと私は思っています。つまり、このようなかかわりの中で新たな自分をつくっていく。その中で他者は非常に重要なワードになるだろうと私も感じています。

その「多様さ」を運動の視点から見てみようかと思えます。これは全身持久力の経年変化の図なのですが、よく新聞で出てくるのはこの平均の右肩下がりなのです。いわゆる団塊ジュニアの世代、いわゆる大人世代、親世代から見て、今の子供たちが下がっていますということがよく新聞報道で2～3年前まで、大分ここで下げどまりになって最近では出てこなくなりました。これが問題だ、問題だ、つまり、体力低下が問題だということを言うのですが、そんなことはないと思っています。なぜか、だって今のトップはすごいではないですか。この前の世界陸連で高校生が表彰されました。彼が外国にルーツがあるとか、そんなことを言っただめなのです。今の子供たちがすごいのは間違いないのです。早稲田実業の1年生が5番ですごい大活躍をしました。バルセロナやリアル・マドリードという世界でトップクラブの下部組織で、日本の子供たちが活躍をしています。一人は戻ってきてしまってFC東京のほうで今は活躍していますが、以前、つまり我々親世代のときにはいなかったようなすごい結果が出ているのです。この縦線は標準偏差なので6割ぐらいの人たちの集団がいるということは、実はこの青よりももっと上の子供たちがいっぱいいるのです。

問題はこの赤線なのです。今の親世代は緑の線ぐらいのばらつきであったものが、今はこんなに開いてしまっている。これが問題だということです。つまり、体力格差が問題であろう。

これは昨年度出された文科省のデータなのですが、中学校は格差が激しいので見てください。上の黄色い抽象グラフなのですが、縦軸が人数です。横軸が1週間当たりの運動の分数です。女子を見てください。一番グラフで多いのは0分なのです。何と女子中学生の8人に1人が保健体育と通学以外で運動ゼロです。8人に1人です。これはもう大変な問題です。つまり、先ほどの小貫先生のモデルで言うところの参加をしていない、活動もしていないというのが8人に1人、これは非常に問題だと思っています。

さらに問題なのは右下の図なのですが、青いグラフは運動時間420分未満の女子でまとめたものです。赤が420分以上、実は二山できてしまいます。これは5年前までは運動する子としない子の格差が見えていたのですが、結果は一山におさまっていたのです。ここでは結果が二山になり始めています。女子の中学生と女子の高校生

に見られる顕著な問題です。つまり、運動する子としない子の格差は体力格差にまで影響を与えているということなのです。これは恐らく社会保障の問題から言って、この後、大きな問題につながってくるかと考えられます。

近年の研究では、この格差の問題はもうわかっていたのですが、一番影響を与えているのは家庭の経済格差なのです。日野の大綱にも書いてある貧困の影響が、非常にここで影響を与えているというところが今の問題の裏に潜んだ問題かと考えます。つまり、家庭収入が低いお宅のお子さんは残念ながら体力も低い傾向にあり、学力も低い傾向にあり、肥満傾向にもあり、虫歯もたくさんあるというのが根拠として、数字としてあらわれてきていますので、包み込む組織として貧困であるとか、家庭の問題を挙げていただくというのは非常にいいことかと思いつつ、この大綱を見ていました。

運動世界というところに話を戻してみると、全ての子供を対象とするのが公教育、あるいは総合教育会議の立ち位置からすると大事かと考えます。その立場からするとどういったアプローチが必要なのかということなのです。現代、全ての学習者に求められているのは、私は身体的リテラシーだと考えています。これはまだ日本語になっていません。だから、造語だと思ってください。いわゆるPISA調査なんかでも、あるいは国内で行われている学力テストBなんかでも、活用能力、リテラシーが求められていると言えます。PISA調査なんかですと科学的リテラシー、あるいは数学的リテラシー、読解力とも言われますが読解リテラシー、活用力が非常に重要であると言われていますが、それが身体面でも言われてきているということです。これもここ1～2年の話です。

実は、この前、日野のプロジェクトでお話しさせていただいて、要はこちらを育てましょうという形で、今、小中学校の先生方に投げかけ始めたところです。これも日本語がないので左がよろしくないという昔の例です。富士山型モデルだと思ってください。一番上にはElite層がいます。その下にSub-Elite、発達させられる育成年代があって、Recreationalなものやいわゆる学習、学校教育がその下にあるというモデルです。でも、考えてください。富士山型のように三角形になっていますが、ここに入っていない人たちがいるのです。その人たちは運動から離れてしまっているのですかという話なのです。

今の学習指導要領の「見る」「支える」は大事なことです。そこで間接的に運動に参加するならば、私は参加だと思っています。例えば「支える」の中に保護者コーチのように、地域の少年団と一緒にサッカーやバスケットをして、あるいはそれを支える保護者として、1カ月に1回ぐらいお父さんやお母さんと対戦してみようみたいなもので参加をしているのなら平和だと思います。でも、本当にそれをただ見ているだけであるならば、指導者は動く量があるでしょうけれども、その保護者はただの見る人です。テレビを見ている人と余り変わりません。身体活動をしていないに等しいです。その人たちの社会保障あるいは生活習慣病というのはどうなるかというところが心配になります。つまり、しない人たちのことを考えない、上に向かっていく組織なので

す。

右側の図を見てください。これがこれからのモデルだと思ってください。ちょうど今いただいている原稿で、これを日本語に訳して出そうとかと思っていますが、全ての人たち、下が *Infant* なのでちびっ子です。上が *Senior* なのでお年寄りだと思ってください。全員に必要なのは身体的リテラシーを育むこと。もちろんスポーツ的につながるものも必要です。そして、その一部が *Excellence* と言われるプロ選手になったり、プロはないにしても日本リーグで活躍するような方たちです。しかしながら、その多くの方が *Senior* になる前に引退を余儀なくされます。イチローとカズはすごいです。40を超えてトップレベルでやっています。

でも、カズでも J1 では活躍がなかなかできません。だんだん淘汰されていってしまうのです。そして、右にあるのが *Competitive Sports*、つまり、競技スポーツとして生涯を通じて楽しんでいく層です。この前、105歳の100メートル選手の話が挙がっていました。もう競争する相手がいないからおもしろくない。でも、105歳までその競技スポーツをやっているのです。すごいと思います。そういう方は本当に多くの方のモデルになると思います。でも、多く人はそういう競技スポーツではなく、一番右の赤い層、*Recreation* であつたり、*Physical Activity* と言われる身体活動、つまり、駅からここまで歩いてきたりとか、一駅手前でおりて、一駅歩いてみようという形で身体活動をしていく方たちなのです。今はそういう活動すらしない中学生までもふえてしまっている。これは本当に厄介な問題だと思っています。

私は、その中の要因に学校教育があるかと正直思っています。つまり、やらせる。数値を上げる。子供たちはもうそれに辟易としているのです。うちの学生たちに聞いている調査では、やらされるという保健体育は本当に嫌でした。何か保健体育の先生というのはいい人もいるのですけれども、中にはいわゆる軍隊的なやり方でやれみたいな形で、スタートは校庭を何周か回ってという、やらされているので楽しくないのです。そういうやらされではなく、心拍数が120ぐらいになる活動をみんなで考えてみようか。なぜ、120と言っているのか。君たちの年齢から言って、120ぐらいの心拍数になる運動が一番健康になるのだよ。そういうものを生涯通じてやっておくと生活習慣病にならないのだよねと意義を伝えて、やり方を考えさせて、それを20分やっておくと脂肪を燃焼するからね、痩せたいのではありませんかという話をするとう健康的にそれで痩せられます。活動であるならば、そこに意味が生じます。そういう意味や意義を立ち上げたあげくに活動に参入させることが大事だと思っています。

知的に高い人たち、高い年収をもらっている人たちは、お昼休みあるいは6時ぐらいに仕事を上げて皇居の周りを走っているのです。でも、残念ながらそういう知識を得て、活動できない人たちは何となくお菓子を食べて、それが何キロカロリーあって、それを食べ続けることによってどんなリスクがあるかを学ばずに。そして、残念ながら貧困ゆえに親御さんが夜にいなかったりするのです。だから、自分の子供たちにお金だけを置いておいて、これで食っておきなと言って。そこでいわゆるジャンクフー

ドを食べ、偏った生活をし、歯磨きをしないで寝て、虫歯になり、肥満になる。そういう悪循環が生まれています。

運動に意味を与えて、楽しい活動を小さいうちからやらせる必要があるかと私は思っています。そういう中で育てていくのが P h y s i c a l L i t e r a c y、簡単に言うと子供たちに好奇心を持たせましょう。そして、探究をさせましょう。やはりマスターになったほうがいいのです。熟達したほうがいいのです。熟達に向けた継続をしましょう。自信を持たせましょう。新たな好奇心をまたを持たせましょうというサイクルを持たせることによって、恐らく生涯を通じて健康になる力、システム、能力を育めるのではないかと考えます。

体力や技能が主観的にでいいのです。客観的ではなくていいのです。よその市より、よその区より高くなくたっていいのです。私は運動好きなのよ、私は運動したいのだと思えるようなものが主観的にあって、能動的に参加できるのは身体的リテラシーがある状態です。だから「体を動かす楽しさ向上プロジェクト」という形で、日野市では今スタートしたということです。

身体的リテラシーを育成するためには繰り返しますが、好奇心をそそること。探究をさせること。そして、自信を持たせ、運動から逃避する子が多いので逃避をさせないことが最低条件になるかと思えます。

後ほど質問をしていただければと思います。そして、私はすごく参考になるのはこれからと思っているのです。「遊び P l a y」の3条件というのがあるのですが、まず、できるとできないの F i f t y F i f t y が楽しめることです。いつもできることというのは楽しくないのですよ。子供の中では、できないからつまらないと言う子がいるのですが、1足す1をやってごらん、1足す1は2、1足す1は2、1足す1は2、1足す1は2、「つまらない」となるのです。いつもできることもつまらないのです。このできるかどうかざりざりなものがおもしろいのです。この間を楽しませることです。そして、もしスポーツのように勝つと負けるがあるならば、その間の心の動きを楽しめることです。きょうは負けてしまった。でも、次は頑張るぞ。いや、また次も俺が勝つぜということを笑顔で言い合えるという関係が求められている。負けたから走らされたり、もちろん負けたから殴られるなんてことがあってはいけません。大前提として安心感があるということです。これが p l a y、遊びの大前提ということなのです。

何かできなければならぬとなってしまうと、できない子は逃避をするのです。何か勝たなければいけないとなると、僕、勝てないからやめます。私はそもそも部活に入りませんという感じになってしまうのです。そうではなくて、教育活動の一環なので負けることもあるのだよ、でも、次は勝てるように頑張ろうという形で、そういう活動を続けていくことが何より大事かと思っています。

意味が立ち上がるようなものに、意義を加えられたらいいかということで、これは時間になりますのでささっと流してしまいます。

先ほど申し上げたとおり、肥満は30年前の3倍になっています。女子生徒は痩せ

たがっています。栄養面を見るとひどいものです。食べていません。食べないことによって痩せればいいと思っています。メディアの影響です。でも、それがいわゆる骨密度の減少につながったり、月経不順であったり、よくない生活習慣になっているということを指導していかなければいけません。食べなければだめなのです。これは御存じのとおり、朝御飯を食べる子のほうが全ての学力テストで点が高いのです。一番色の青いものが毎日朝御飯を食べている子です。2番目の緑はどちらかといえば食べている。赤は余り食べていない。黄色が全く食べていない。全教科で見事な相関関係が認められます。食べさせたほうがいいです。

これも有名な話ですけれども、学力テストと体力テストは相関にあり、そして、進学校ほど文武両道なのです。二番手校は今、東大へ入る数とかをすごく気にして部活をやらなくていいから、いわゆる国立大に入りなさいとか、WとかKの大学に入りなさいということをすごく言っているのですが、入った後の話を我々の同僚から聞くと、勉強しかしてこなかった子はここ一番で頑張れないということを言います。先ほどエビデンスが必要だというお話が小貫先生からもあったのですが、実は運動をさせると50%以上が学力面にいい影響があるという研究結果、世界的に今、251件でそういう学力と運動の関係をあらわすエビデンスの科学的根拠になるデータがあるのですが、半分以上が統計的に、つまり、科学的に効果ありだと言われています。47.8%はどちらとも言えない。マイナス効果があったというのは1.6%です。やらせたほうがいいのではないかと私は思います。

運動ばかりしていると、脳みそが筋肉になってしまうぞと昔は言われましたよね。これは多分、運動させていたいわゆる体罰するような先生の話かと思うのです。ペンフィールドという学者が脳の中で運動させるときに、どこが活動するか、それで明らかにした実験なのですが、ほとんどが運動機能と関連をしている。これが90年代になるとハワード・ガードナーという学者が多重知性論という形で、脳の部位はいろいろな知能に影響を与えることを示しています。つまり、いろいろなものを記憶するというのは、この奥のほうにある海馬だけであって、御存じのとおり、今は知識がグーグルの中にある時代です。知らないことは調べられるのです。どんなに頭のいい人の記憶よりもハードディスクのほうが絶対確かです。つまり、それよりもリテラシーなのです。知識を活用できる能力が求められているということで、さまざまな知能が求められている。

スポーツは、もちろん身体、運動知能であったり、戦術であったり、空間認知、スペースを見つける力やアーティスティックなもの、リズム感であったり、コミュニケーション、そして、ここが大事です。これがない人は脳みそが筋肉と言われてしまうので、相手をリスペクトすることです。終わった後はノーサイドで、あなたがいたからいい試合ができたと言える人を育てる。これが何より重要かと思っています。

これは全て海馬にかかわるところで、実は記憶に影響を与えそうということがわかってきたのです。先ほど「活動」と「心身機能・構造」との相互性という話があったのですが、どうやら歯状回と呼ばれる海馬の一部には血流量がふえる。つまり、運

動をたくさんさせることによって記憶がよくなるのではないか。これを実践していたのは2,500年前の孔子あるいはソクラテスなのです。弟子と歩きながら必ず問答しているのです。同じように北欧では背もたれのない椅子を使って学習させ始めています。つまり、バランスをとらせながら脳の血流を上げることを今は学校教育でも行ったりしています。科学的エビデンスに基づいています。

日本の子供たちはネガティブなのです。本当に憂鬱感が高いのです。これは困ったもので見てください。一番左側が日本なのですが、価値のある人間がこれしかいないのです。去年、アメリカで本当かと出張で行ったときに見てきたのですけれども、本当に？と思う学生もたくさんいたのですが、半数以上で私は価値があります。そして、中国は40%、韓国だと20%、日本人は儒教的なので謙虚だと言う方もいらっしゃるのですが、そのルーツを言ってしまうのは韓国も一緒なのです。でも、明らかに日本の高校生だけ明らかに統計的に有意な差があるぐらい低いのです。これはゆゆしき問題だということなのです。

御存じのとおり、いわゆる心に病がある国民がふえてきていて、つまり、100人に1人が何らかの病を抱えているとなると、これはかなり健康状態としてよくないだろう。なかなか活動参加ができない状況になってきてしまっているということなのです。これは明らかによくない。そして、そのために運動させたほうがいいだろうということなのです。

時間をオーバーしてしまったので、急ぎで説明します。

一番上は自然体験が多いか少ないか、自然体験が多かった子供ほど、関心や意欲が多くなるということなのです。もっと学びたいとか、もっと新しいことにチャレンジしたいという意欲が高くなる傾向があるというエビデンスなのです。

真ん中は友達との遊びなのです。でも、友達との遊び体験の中にはけんかも入っているのです。そういうけんかをした子ほど社会のルールやマナーを大切にしたい、しなければいけないという規範意識が高くなるというエビデンスなのです。

そして地域活動に多く参加した子ほど職業意識が高くなったりするという結果なのです。つまり、かなり身体活動というのは多くのエビデンスを持っているということです。

これは活動の場に注目したのですが、グリーン・エクササイズと言いまして、つまり、自然の中で運動させるとさらに効果があるということなのです。米印があるというのは統計的に有意な差がある。POMS調査なので、事前と事後でどのぐらいの差がありましたかという調査なのですが、非常に効果が高かったということなのです。特に水辺活動、昔では臨海学校であるとか林間学校とありましたよね。やはり価値があったのです。そして私がよかったと思うのは都市の緑化空間で、日野市は結構力を入れてますよね。きれいな公園がこの周囲にもあったりして、そういうところで遊ばせることです。あるいは学校の中にちょっと動きたくするような環境を与えることです。よって、子供たちのそういうストレスを発散できるような何かのチャンスになるのかと思います。

最後です。いやらしい話です。子供のころの体験が多い人のほうが年収は高いのです。どうですか、皆さん、きっと子供のころはたくさん遊んでいた方ではないかと私は勝手に推察しているのですが、こういうエビデンスもあるのです。こういうものは保護者に伝えていくべきです。たくさん体を動かしましょうということをするによって、心も体も豊かになっていきますというまとめです。

以上です。ありがとうございました。（拍手）

○仁賀田企画調整課長 梅澤先生、どうもありがとうございました。

それでは、次に意見交換に移りたいと思いますけれども、少しテーブルの配置などを変えますので、委員の方々はそのまま御着席のままでお待ちください。

（テーブル配置変更・席移動）

○仁賀田企画調整課長 意見交換を始めるに当たりまして、メンバーの紹介をさせていただきます。

まず、総合教育会議の委員の方々でございます。

大坪日野市長でございます。

西田日野市教育委員会教育委員長でございます。

高木日野市教育委員会委員長職務代理者でございます。

○高木教育委員会職務代理者 よろしくお願ひします。

○仁賀田企画調整課長 岡本日野市教育委員会委員でございます。

○岡本教育委員 よろしくお願ひします。

○仁賀田企画調整課長 濱屋日野市教育委員会委員でございます。

○濱屋教育委員 よろしくお願ひします。

○仁賀田企画調整課長 そして、米田日野市教育長でございます。

○米田教育長 よろしくお願ひします。

○仁賀田企画調整課長 続いて、市の部長職を紹介させていただきます。

池田子ども部長でございます。

○池田子ども部長 池田です。よろしくお願ひいたします。

○仁賀田企画調整課長 徳田まちづくり部文化芸術スポーツ担当参事でございます。

○徳田まちづくり部参事 よろしくお願ひします。

○仁賀田企画調整課長 田倉教育部生涯学習担当参事でございます。

○田倉教育部参事 よろしくお願ひいたします。

○仁賀田企画調整課長 記野教育部教育指導担当参事でございます。

○記野教育部参事 よろしくお願ひします。

○仁賀田企画調整課長 松本教育部長でございます。

○松本教育部長 よろしくお願ひいたします。

○仁賀田企画調整課長 赤久保健康福祉部長でございます。

○赤久保健康福祉部長 よろしくお願ひいたします。

○仁賀田企画調整課長 大島企画部長でございます。

○大島企画部長 大島です。よろしくお願ひします。

○仁賀田企画調整課長 以上でございます。よろしくお願いいたします。

それでは、お待たせいたしました。引き続き意見交換を行いたいと思います。意見交換の進行は企画部長にお願いをいたします。よろしくお願いいたします。

○大島企画部長 小貫先生、梅澤先生、ありがとうございました。大変興味深いお話をいただいたかと思います。

残りの時間を意見交換ということで設定をさせていただいております。きょうのお二方の先生からの御講演に関しての御質問、先生方お二人にもそれぞれに思うところが、きょうはお二方の交差点みたいに少し感じられたところもありますので、先生方にも御発言をいただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

どなたか、口火を切っていただける方がいらっしゃるかと思いますが、いかがでしょうか。大体、こういう席で口火を切るのはやりにくいものなのではと思いますが、私の立場で指名しやすい方からということでよろしいでしょうか。

大坪市長、いかがですか。座長としてということで、役割はきょう私が進行させていただきますけれども、まず、座長から口火を切っていただければありがたい。

○大坪市長 お二人の先生は、今、部長が言いましたように交差する部分があって、大変おもしろくて、実は小貫先生のほうの I C I D H の *i m p a i r m e n t*、*d i s a b i l i t y*、*h a n d i c a p* というのは結構勉強したことがありまして、それから、2001年に大分変わったと個人的には思っております、障害を軽減するという。要は心身機能向上に影響するという廃用症候群の話なんかを興味深く伺わせていただきました。

どちらかという、比較的障害というのは治せない、変わらないので、したがって、要は障害を一つの個性と考えて、なるべくそれが不利にならないようにするという思考でずっといたのかと思いますけれども、多分、今のインクルーシブでいったら、もっとそれを超えているのかなというのを、正直なところ驚きでありまして、ある意味で日野スタンダードだという発言していながら、余り理解せずにしゃべっていることもあるのかなというのが正直な感想です。

そういう意味で言うと、当然 I C F モデルというのは障害者のみではなく、当然障害を持つ以外の子供の育成、教育も含めて考えて生かしていくようになる。ある意味でものの見方といいますか、人間に対する考え方自体を変えなければならないし、正直、勉強不足なのかなというのを非常に感じたところです。

梅澤先生のお話は、非常にリテラシーということで物すごく興味深く感じましたし、最近、学力テストでその結果を公表するしないというのが大きな問題になっていると思いますし、静岡県知事の話なんかもあって、そのごときと思いながら聞いていまして、リテラシーというのは取り組み能力といいますか、それを上げるということはすごくおもしろいと思いましたが、わくわくドキドキ、興味、没頭するということの楽しさといいますか、そこを中心にするのはすごくいいと思いましたが、逆にオリンピック・パラリンピックがあって、これから選手を強化するということが今は言われていて、それに対してのある意味の異議申し立てでもありますけれども、ただ、も

う一方でオリンピックを契機に日野市では、徳田参事が専門ですけれども、スポーツをやる人の数、そして、やる時間をふやしていこうというお話になっている。

多分、それは恐らく行政が計画をつくって、スポーツをやいなさいと言っても多分やらないと思います。やらされ感ではなくて、どうやったら積極的にスポーツに取り組むようになるのか、実はスポーツ振興計画では目標値を掲げています。市民の70%です。掲げるのは簡単です。どうやってというところについては、恐らくスポーツ振興計画の中では意外とないと思います。もちろん一応計画があって、こういうふうにしますというのはあるのだけれども、いわゆるリテラシーを高めて、その気にさせるためにはどうするかという部分についての言及はなかったもので、その辺で物すごく参考になりましたし、行政として、オリンピック・パラリンピックに向けてはもちろんすぐれた競技選手も育成しなければならないけれども、それは一部でやって、全体として、オリンピック・パラリンピックを契機として、どうやってみんながスポーツを楽しみ没頭するようになるのか、そういう人たちをいかにしてふやしていくか、子供たちをふやしていくのかという課題でありまして、その辺がすごく刺激的で有意義な話を聞き取れたと思いますので、本当にありがとうございました。

感想を述べたものでございます。

○大島企画部長 お二方の先生の講演に対する感想ということで、市長よりいただきました。

それでは、一言ずつリアクションといいましょうか、障害の認識についての我々共通の固定観念をというお話があったかと思います。それから、梅澤先生にはスポーツをやる気にさせる。するつもりになってもらうというところに関しての感想になるかと思いますが、小貫先生、障害の認識ということについてです。

○小貫悟氏 市長がおっしゃっている個人個人の育成というところから、環境の中で障害が起きているのだという話は謙虚におっしゃいましたけれども、基本的には、教育のこれまでの常識みたいなところがあって、障害がある子をどう育てるかときたわけですけれども、障害のない子をどう育てるかというのがインクルーシブ、つまり障害がある子とともに教室の中で学んでいく中でどう完結するというか、一つのものになるわけですから、それを実現して、一つの提案をしたということが日野の大変視察の多い理由であるということですので、一つの環境という視点が手に入れられたというのが現状です。

ところが、ICFのモデルのように実は個人因子も大事で、環境だけを整えるのかというところではなくて、自助能力みたいなものを特別支援教育という中で育てなければいけないということを忘れてはいけません。

環境因子のことは、恐らく特に福祉の担当部局の方は大変興味がある合理的配慮の問題ともつながってくる大きなテーマで、どう環境をつくっていくかということで、今は一気にぶれているのです。でも、自分自身がどう育てていくかということを経験しながら、成長を喜ぶということは障害があってもなくてもあるわけですので、今、また特別支援教育で都が3次計画を立ち上げて大きく動かそうとしていますので、こ

ここで日野がつくってきたものを一回とにかく壊してと言うと言い過ぎかもしれないのですけれども、どうしても積み上げたくなるのですが、一旦全部ちゃらにして、もう一回つくり直すぐらいの気持ちでいくと良いと思います。

シカゴのユニバーサルデザインで大変有名な学校があって、8月にそこを見に行ったときにすごく感激したのが、1年生の学籍番号みたいなものが義務教育であるのですけれども、全員に2028が振ってあるのです。その後ろに一人ひとりの数字があるのですけれども、これはどんな意味だと思いますか。2028というのが頭につくのです。

今の1年生というのは、アメリカは5歳で入学なので2010年生まれなのです。だから、あちらは義務教育段階が18歳なので、2028にこの子たちは社会の一員になりますというのを、1年生の段階から学籍をここに付けているのです。そうすると、今はできなかつたりするのだけれども、2028年にどんな姿で送り出すかということ、1年生から、ティーチャーたちはすごく未来をつくっているという思いがあるのです。Class of 2028と言うのです。特に今できるできないではなくて、社会の一員、2028年にはもしかしてこんなに計算ができないけれども、計算なんかしていないかもしれない。もう電卓どころではないかもしれないと言っているのです。読めない、書けないかもしれないけれども、吹き込んで文章になっているかもしれないという、だから、どんな姿をイメージしながらやるかということ、特別支援教育は得意としてきたところなのですけれども、そこから逆算して自立するところはどんなふう育てていくかということを考える。もしかしたら、この発想はどの国も言えるかもしれないという気はします。

日本は大学生の途中で成人するので、なかなかそんな国ではないのですけれども、環境因子をやりながらも個人因子を忘れないイメージでいきたいという未来で、今後の特別支援教育をやりたいと思っています。

○梅澤秋久氏 市長からいただいたお言葉に、全員をその気にさせる。これが小貫先生の言葉をかりれば、まさに個人因子を上げるすべかだと思います。全ての子供を運動から逃避させないことが多分将来の日野の一つにつながるかと思っています。

今の子たちは途中で運動から逃避してしまうのです。広く一般の女子中学生や男子も谷が大きかったです。やめていってしまう。運動することが嫌になってしまう。つまり、嫌になる子をつくらないというより、個人としての成長を一つ保障するということです。私が申し上げた中心はそこだったのです。

しかしながら、それは競技者を育成するなという話ではありません。広く全員に向けてやるということが大前提なので、まずはそこをやる。恐らく競技者養成、競技者育成はクラブチームであるとか、恐らく学校以外で培われると思います。社会体育でそういう施設やそういう制度があるならば、そこをぜひ活用したほうが良いかもわかりません。

例えばサッカーで言うといわゆるJリーグの下部組織上がりの日本代表が今はふえてきています。それは学校教育ではないです。でも、Jリーグが地域と連携してやり

ましようというのを結構ベースにしています。そういうところで間接的にかかわることは可能かと思われま。あるいは地域のスポーツ少年団、これは学校教育ではありませんが、もしかすると教育委員会の傘下にあるものかも知れませ。そういうところで、やりたい人たちはもちろん伸ばしますというプラスアルファを持っているといいのかと思いま。

その際、必要になってくるのは環境因子の部分かと思いま。先ほどの目標値70%、つまり、生涯を通じて運動に親しむ人は70%にしまし。数字があると、どうしてもその数字のために頑張らなければいけななのですが、そのためには、一つは環境因子かと思いま。

もう一つの手だて、これはいやらしい話なのですが、スポーツといういわゆる競技スポーツっぽいものを取り外してしまくと、比較的その数字は上げやすくなるかと思いま。先ほど申し上げた一駅前から歩くことを週に1回以上していますか。あるいはそういう意義とか価値が広く市民に伝わってれば、そういうPhysical Activity、身体活動はスポーツではありません。でも絶対健康になります。

着るものから用具をそろえて、人数を集めて、場所となるとなかなかおっくうです。だから、今、ウォーキングであるとかジョギングがはやっているのです。そんなに人や用具、時間の設定の必要がないからなのです。それに参入するのもいいのですが、でも、なかなか時間がない、時間外労働時間が非常に長い国なので、ならば10分、15分、行きと帰りに早歩き的时间をつくる。それだけで1日30分の運動なのです。そういった何か違ったものに価値づけをすることによって、まさに健康になり、70%にちょっと近づいたりというところも一つの手段として必要だからということ、話を伺いながら感じていました。

以上です。

○大島企画部長 ありがとうございます。

ここらで、私から指名するのはもういいのかと思っていますので、少しお話しただければと思いますけれども、もう少しウォーミングアップの時間が必要ですか。

○米田教育長 多分、大丈夫。

○大島企画部長 どうぞ。

○濱屋教育委員 小貫先生、10年もかかわっていただいてありがとうございます。

私は、先生のお話を伺いながら、夏の全体研修のことを思い出していました。盛山先生の授業では、学力的に課題がある子も、障害を持っている子もすごく集中して聞いていて、先生がお話になっていた参加と活動が大事だということがよくわかりました。

あのときに、盛山先生がおっしゃっていたことは、説明で授業を展開するのではなくて、発問で授業を展開し、考える時間を確保することが大事であるということでした。先生の発問に対して、子供たちが自分で課題を見つけるということが大切であるという話は、梅澤先生の話にあったこととできないことに間があることが面白いという話とつながっているなと思いました。まず問いがあって、それを自分が参加

し、友達と話し合いながら解決に向かっていく力は、これからの教育について、大事なことのひとつであると思いました。

一つ、質問なのですが、先ほど発言の中に合理的配慮という言葉がありました。配慮が必要な子にとっては、適当かつ必要な調整であり、学校や教育行政にとっても過度な財政的な負担を課さないものとされていますが、この言葉は、関係者で共有されたほうがいいのではないかと思います。文科省では、データベースをつくることも大事であると言っていたと思いますが、今後どの様に共有していくのがいいかということについて、お考えがあれば、お聞かせいただけますでしょうか。

○小貫悟先生 まだ読み込んでいないのですが、11月、つい最近に対応指針が文科省、厚労省から出ましたけれども、もう少し読まないといけないです。ただ、ああいう細かい話になってしまうと混乱するので、一番大事なことはアクセシビリティの確保ですから、特別支援と合理的配慮が混乱してはいけなくて、梅澤先生がいらっしゃるから、スポーツで言えばフェアな競争と言うべきもので、参加、アクセスできない。書けない子は板書を写さないわけです。そうすると、いよいよもうiPadの時代なのか、写真を撮ってしまえばいいではないか。これをやったらこの子は書けない子になるといって、学校が写真なんかだめだよと言うわけです。ところが、今度はノートをずっととらないでいたら、1年、2年たったら勉強についていけなくなるというわけです。これは明らかにフェアな状況ではない。

ただ、そういうアクセスをしながら、結果でほかの子になかなかついていけないということは当然あり得ることなのだと思いますけれども、まずは授業にアクセスしているかどうかということをしっかり考えなければいけないです。

だから、この大人の思いと現実、子供の思いというのがちゃんと話し合えないと、きちんと表現されて落としていかなければ、一番大事なことは子供の思いというのが、どんなふうにくみ取れるかという問題で、特にまだ小さい子供たちがたくさんいますので、そういうことはそんなに簡単ではない。本当に合理的な配慮は複雑系な話だと思います。ただし、我々の視点としてはアクセスできていない。アクセスさせているという実感があるかどうかというように、そこだけは絶対にやっていかなければいけないと思います。

○濱屋教育委員 わかりました。ありがとうございます。

○大島企画部長 御発言いただければと思います。

徳田参事、オリンピック・パラリンピックのお話も出ていたわけですが、

○徳田まちづくり部参事 そうですね。すごく参考になりました。先ほどおっしゃっていたウォーキングといったことについては、アンケートのとり方が以前は悪かったので、何がスポーツかというのがわからないで答えていただいていたので、40%程度だったというのが日野市の現状なのだと思いますけれども、東京都も70%を目指しているのですが、東京都がアンケートをとると55%の人が週1回運動している。このギャップは何だ、アンケートのとり方であろうということで、何がスポーツかという定義について、きちんと定義のほうをしてもらって、これなら私もやればいいのかと思うところ

ろをつくっていきたいと思っています。

実際に、子供たちが運動していないという実感があって、我が家を見ても、妻は54歳になりますけれども、子供のころから運動していないので、54年間ずっと運動していないのです。これはすごく悪い例なのですけれども、目の前にある中で、娘もそちらをまねしてしまったら運動しなくなってしまう。目の前にそういう現象があっても、自分の仕事はスポーツさせることですから、この人が動くようになればというのが、逆に言うとわかりやすい例で、先ほどおっしゃっていた意味づけとか意義づけということで、明らかに健康に異常が出てくる。これをやらないと大変なことになるというそこからのアクセスというのは、ある程度、年をとった人には効くのかと思っています。

子供たちは家というより、学校で運動してこないとつらいと感じました。私の所管の中では、どうしても学校教育をやることは当然できませんから、学校に期待するしかないのですけれども、今度、オリンピック・パラリンピックという機会に何か触れておいてくださいということを全校でやっていただいているので、要はオリンピック・パラリンピックというのはやったって、日野市で競技がやられるわけでもないですし、はっきり言って地方と同じように、それが50分か1時間で行くのか、2時間、3時間かかるかという程度の差でしょうから、そういう意味では離れたことをやっているのですが、これをきっかけにして何か変わるということは可能なのだろう。オリンピックという世界最高レベルのものを見ることによって、スポーツというのはいいなところ、自分も何かできないかと思っておられるような、そういう仕掛けをしなければいけないのだと思っています。

「する」「観る」「支える」という3つの言葉ですけれども、本音を言っているのに等しいわけです。でも、スポーツ推進計画の中にも「する」「観る」「支える」というのは書いてありますけれども「観る」ところから「する」ところへどうやって動いてもらうかということも考えなければなりませんし「支える」というのは、お互いさまという中でやってもらいたいと思います。

そうやっていく中で、一つ質問したいところは、競技スポーツといわゆるレクリエーション系、あるいは誰でもできる運動というところの中で、どうしても行政の仕組みの中では体育協会というものがあって、そこときちんと関係性を持っていかなければできませんし、競技スポーツを支えている団体があるのですけれども、そこどうやってお付き合いしていくのか、ボランティア一つとっても、体育協会の下のところにはボランティアが行くと各競技団体でお手伝いに来た人だとか、実は体育会的な上下関係の中で命令して、ボランティアではなくて奴隷のようになってしまって、できないということもある。その辺の関係性というのはどうやっているのかというのは、今、苦勞している悩みなので、何かほかにあれば聞きたい、教えていただきたいです。
○梅澤秋久氏 一番難しい質問が来てしまいましたね。

体育の歴史の話をしてみますと、体育は全ての国において、共通してある目的のためにつくられた教科なのです。何のことかわかりますか。これは富国強兵、軍事力なので

す。日本でも例にたがわず、明治時代の体育教師は三等歩兵の35歳以上の方が宛てがわれていました。本当に軍人さんなのです。その名残が、いまだにいわゆる体育会系的な上下関係であるとか命令系統につながっているのかという感じは正直します。

体育教師像を明らかにした研究においてはいわゆる軍人的体育教師と、最近ではスポーツマン的タイプ、後者になってくると比較的明るくて、スポーツ万能という学習者からの印象が強くなるのですが、どうしても前者、いわゆる軍人部分がなかなか抜け切れないのが体育やスポーツの指導者の像であるということなのです。

これを変えるのは、私もあったら教えていただきたいというのが率直な話です。だって、あれだけ体罰がだめだ、だめだと言っているのに、それでも自分は体罰を受けて強くなったからと桜宮高校の先生が教えました。それで受けてきた経験で自分自身が構成されています。身体性と言いますが、経験上、そういう自分がつくられてしまっているのです。そういう方たちを変えられるすべは、恐らく世代を超えないと変えられませんというのが率直な話です。

しかしながら、今はそういうカウンセリングマインドみたいな、傾聴型の方たちの率がふえてきています。これは、市長さんがこの中で一番振られやすい人で最初に振られていますし、恐らくそういう上の方たちもすごく耳を傾けてくださる方がふえてきているというのが正直なところだと思います。そういう方に対する価値づけをしていくことがすごく求められている。あるいはそういう指導者講習会みたいなところで、こういう指導者が求められていますということをやわらかに伝えるという形で、指導者を指導していくシステムもつくる。正直、変わりませんが、それを長いこと続けていくことによって、だんだん変わっていくかと思えます。支える方が少なくなってしまうというのはよくわかります。

○徳田まちづくり部参事 勝利至上主義なのです。

○梅澤秋久氏 昔の方はおっしゃるとおりです。

私は、勝利を目的にすることは悪いことではないと思っています。あえて変えるために勝利追求主義に変えましょう。勝利でなければならぬを排除しましょう。勝利があったほうが楽しいのです。競争があったほうが盛り上がるのです。でも、勝たねばならぬを外しましょうということを推奨しています。勝利を追求する形にしましょう。特に育成世代の指導者なので、そこで勝ったからといって一生遊んで暮らせるわけではないので、そういうことをやわらかに伝えていただけるとすごく平和かと感じます。

○徳田まちづくり部参事 ありがとうございます。

○大島企画部長 徳田参事、ありがとうございました。

松本部長。

○松本教育部長 梅澤先生の最初のパワーポイントのシャトルランの話で、意外にも東京が1位ということで、その影響は運動部の活動の影響だということがありました。世界的にも余りまだ例がないということで、その一方、オリンピック・パラリンピックに向けて、うちの市も25校全校が指定を受けているわけなのですけれども、そう

いった中で競技力の向上、技能傾斜ということに進んでいくという中で、既に中学校の部活の位置づけというのはどうなのかということを感じたところなのです。

例えば、裾野が広いサッカーなんていうのは、非常にうまい子なんかは地域のクラブに行ってしまうということがあって、それはサッカーだけに限らず、野球なんかもかなりそういった状況があるのではないかとことです。それから、バスケットなんかについても、既にJリーグのFC東京とか、アルビレックス新潟といったところがクラブチームを持っているのです。そうすると、もちろん学校教育は保健体育のところが必要になるでしょうけれども、そういった中で中学校の部活というのは、今後どうなっていくのかというのは教えていただければということなのです。

○梅澤秋久氏 あくまでも私見になりますが、運動部活動の一番すぐれたところは指導者がいるということです。その先生にスポーツ経験がないにしても、必ず大人の管理下にあるということです。そして、下校する前にあれだけ広いグラウンドや体育館、プールという施設を使えるということは非常にプラスです。しかも、無料でできる点に広く裾野が開かれているよさがあるということが世界的に評価されています。

欧米であるとかは、一つの学校に対する通学区域が広いのです。だから、3時になるとスクールバスが来て、さよならというのが大前提になってまいります。日本は比較的人口密度が高くて、多くの遊び場がないのが現実なのですが、その学校内で運動ができる。あるいは吹奏楽でもいいのですが、文化的な活動ができるという部分に一つの価値があるのかと思っています。

先ほど、ユースチームであるとかクラブチームは、より勝利を追求する立ち位置として、私はすごくいいかと思えます。運動部活動は教育活動の一環であるべきだと私は考えているからです。現行の学習指導要領から教育課程の一部という形で明文化されました。それまでは、運動部活動はかなり立ち位置が余りはっきりしないものだったのです。何となく考えて、何となく先生がやらなければいけなくて、何となく中学校の先生と結婚すると、土日はいないみたいな形ができていたのですが、余りやり過ぎるのも正直私はよくないと思っています、これは子供のためにも、先生のためにもです。

私は、保健体育科教育が専門なので、いわゆる保健体育の先生というのは、保健体育の授業づくりよりも部活の指導ばかりが熱心になってしまう傾向が強いのです。会うと大体お前、この大会はどうだったかという上下関係の中にある。やはり上は先輩が絶対であって、お前だめだったじゃん、弱いじゃねえかよみたいな話し合いからスタートし、つまり、授業がどうこうではなく、部活での立ち位置にかなり影響を及ぼしてしまう。これはすごくもったいない。運動部活動で教員採用試験を受かったわけではないにもかかわらず、運動部活動に支配されてしまう絵図がよくないと正直思っています。授業で各先生方は勝負をすべきですし、教育活動の一部として部活があるべきかと思っています。

でも、広く世界のトップにつながる子も日野から出る可能性がありますし、そういう子たちは育成しなければいけません。そういう子たちは、地域で行われているスポ

ーツクラブにぜひ行ってほしいと思います。正直、お金も時間もかかりますが、多分、その子の将来のために自分と親御さんが選択したという道だからです。そのすみ分けをうまくしていくといいのかと思います。

○大島企画部長 岡本先生。

○岡本教育委員 お二方から大変貴重なお話をいただきまして、ありがとうございます。

実は3年前に小貫先生にお話を聞いて、そのときはよく理解していなかったのですが、私は公共事業の計画等の設計をしている企業だったものですから、ユニバーサルデザインという言葉はその業界での理解でいました。そのお話を終わった後に、小貫先生に質問しましたら最終的には質を上げる。そのような意味のお話をされたのですけれども、きょうのお話を聞いて大変理解が進んだという思いです。

きょうは、大綱のための会議だったものですから、ちょっと別なというか、私たちが直面している問題についてお尋ねしたいと思っております。

昨今の状況というのは、団塊の世代が定年退職して若手の先生が多くなって、日野市も御案内のような状況です。

一方で大学改革もいろいろな分野で進んでいます。一般的な社会からは即戦力になるというよりは体力もあり、国際性を持った人材の育成というものが求められているのだと言われておりまして、私なりの解釈としては例えばリベラル・アーツとか高い教養といった側面と理解しております。

また、教育のインフラでハードの面では、施設の更新とか統廃合といった厳しい状況が続いております。そして、きょうのように日野市が新たに教育大綱を定めるに当たって、教育環境の一番大切なところは先生の人材育成ではないか。日野市の場合だったら幼稚園も含めて、小中学校の先生の人材育成ではないかと思っておりますけれども、大学における教育関連学部では、現在どのような教員養成あるいは人材育成をお考えになっておられるのか、現場の状況との関連で御意見をお聞かせいただければ大変ありがたいと思います。

といいますのも、市内の小中学校の訪問等で、校長先生から若手あるいは初任者の質のレベルを上げることにいろいろ御苦労されているということをお聞きします。これは決して批判的なことばかりではありません。また、関連しまして、多くのノウハウ、経験を積んでおられるベテランの先生方の力をどのように若手に引き継いでいくか、そういう点に関しても、大学教育という点においてどのようにお考えになっておられるか、この機会にお話を一部でもお聞かせいただければありがたいと思います。

以上です。よろしく申し上げます。

○大島企画部長 教員の養成、また、ベテランからの承継ということで小貫先生。

○小貫悟氏 私、人文学部なのです。

○梅澤秋久氏 私のほうから、御存じのとおり、国立大学教員養成学部は非常にプレッシャーがかかっておりまして、本学教育人間科学部も来年度、学校教育課程ともう一つの間人文化課程とありますが、こちらは完全に来年度募集で終わります。かなり

厳しい状況で、実は学校教育課程はうちの大学で230名の枠がありますが、これも減らしなさいということを経済省からすごくプレッシャーを受けつつ、でも、230の枠を何とか堅持しているという状況です。そのかわり、経済省に約束させられているのは質の高い教員を養成しなさいということです。私はいわゆる教員の数を上げる、何人先生になったかという数を上げるのは余り好きではなかったのです。

実は、前任で日野と絡んでいる帝京大学に私は4年前までおまして、私学なので大学を売るために、どうしてもこれだけの人数を教員にしていますという数を売らなければいけないということで、かなり教員養成にかかわる仕事を私は担いました。でも、数を上げることというのは質の担保につながっていないことが正直嫌で、なぜかという、私は帝京大学に入る前は小学校の教員をしておりまして、ただ、数を上げることが学校現場の質を上げることにつながらないということを経済省で懸念しておりました。

即戦力を養成するというのが、非常に数を上げることとニアリーイコールのような形で言われていることもすごく嫌だったのですが、最近はすごく現場の要請として非常に重要になってきていると思います。なぜかという、いわゆる20代であるとか経験10年未満の先生がすごく多くの割合を、日野も恐らくそうだと思うのですが、つまり、大都市圏ではほとんどの学校がそうなっている状況において、学校自体がうまく回らなくなってしまうことが心配として、いろいろな先生方から聞かれるようになってきたからです。

私たちがすごく意識をしているのは、高度専門職性を上げるということです。この高度な部分は何かという、現代的な教育課題に対応できるということを経済省でキーワードに挙げています。例えば保護者対応です。10年前と決定的に変わったことは保護者対応です。一人の20そこそこの新卒の先生が全て対応することはなかなか難しかろう。でも、そこそこ対応できるような資質や能力を身につけさせて出さないと、学校現場が苦勞してしまう。そういうものに対応できるような、そういうワークショップ的な授業をふやす。つまり、今は話し続けていますが、極力学生たちが話せるような、学生たちがああではない、こうではないと言い合って、こういう場面に立ち会ったらどうするか、こうしようか、ああしようかという形ですぐに使えるような、でも、実は、すぐに使えるは私から言うと100均理論なのです。すぐに使えるものはすぐに使えなくなる可能性があるのです。自分の変えられないような軸として、でも、すぐにでも使えるようなものの両方の軸を相対するものではなく、そこをうまく融合させられることが高度専門職性につながるものかと思っています。

そのためには同僚性が築けることです。先輩の先生や管理職の先生に意見を伺いつつ、いい関係の中で先輩の先生も高まり、若い先生も高まるような関係がつかれることです。そのために極力学校現場につれていく機会をふやしています。授業も常に講義棟で行うのではなく、かなり学校現場に出るような授業の数をふやすように、本学では学校教育課程のカリキュラム改革をしています。加えて、うちの場合は専門職大学院、いわゆる教職大学院を来年度からつくりますので、そこでの専門職性の向上と

学部生をうまく融合させようという形で、今、学部改革をしているところです。きょうの昼間もその委員会で会議をしてまいったところです。

○岡本委員 ありがとうございます。

○大島企画部長 きょうの予定時間もあるのですけれども、ぜひ教育委員の先生方には御発言いただきたいと思っています。

高木委員。

○高木教育委員 きょうはお忙しい中、ありがとうございます。

お二人の先生はテーマが違ったのですけれども、私は基本的に小貫先生のほうから活動なり参加ということと、また、体育活動についてもやらないのではなくて、することが大事だということ、同じように活動に参加することが大事だということ、同じように活動に参加ということでの助言をいただいたのかなということを強く感じました。

今、日野で教育大綱をつくっているのですが、いろいろなキーワードがありますけれども、参加ということなり、その辺のベースになって文化活動だとか体育活動、スポーツなんかも含めて構成していく必要があるのかということ、強く感じた次第です。

そういった意味では、切り口は違うのですけれども相通ずるところと申しますか、底流というか基本、基礎は全く同じなのだなということを改めて強く感じましたので、また今後の論議の中に生かしていきたいと思っておりますので、その都度、助言、アドバイスをいただければ、大変ありがたいということを感じた次第です。

どうもありがとうございます。

○大島企画部長 ありがとうございます。

西田委員長、お願いできますか。

○西田教育委員長 たいへん勉強になりました。ありがとうございます。「参加から理解へ」、「活動することから分かることへ」の過程がよく理解できました。日野市では、セカンドステージ、即ち「分かる授業づくり」に進んでいるのではないかと思います。通常学級で特別支援を必要とする子供さんも一緒に学び、育つ、これが本来の教育の姿だと思っています。

先生方は「どの子も活動する授業」を工夫されていますが、学年が進んでくると、例えば中学生になると、学習内容も難しくなりますから、一緒に学習に参加するにはやや難しいのではないかと、本人に我慢をさせているのではないかと、という疑問を感じることがあります。だれでも分かる学習のカリキュラム作りにさらに取り組む必要を感じました。

また、教室の前の掲示コーナーをカーテンで覆うとか、タイマーを活用するとか、いろいろな工夫がされています。しかし、時々、形式になってしまっているのではないかと申すことがあります。例えば、刺激量を少なくするためにカーテンがしてあっても、周りは刺激物であふれています。黒板の下にいろいろなものが置いてあったりします。横にも掲示物がたくさん貼られています。カーテンが一つのデモンストレーションであるとか、授業や教室の環境を考える一つの象徴だとも聞くのですが、なぜ

そうするのか、その意味をもう一度確認し合いたいと思います。

○小貫悟氏 今のデモンストレーションという話はあるとはならないことです。そんなことをする暇があるのだったら、ほかにやることがいっぱいある。形骸化が一番怖いというところで、これは日野市の最近の話ですけれども、初任者の先生がきれいにカーテンで見えなくして、おっしゃるとおりで大変な刺激なのですけれども、ですから、あの子が帰った後に席に座ってみて、教室がどんなふうに見えているのだろう。カーテンがあることがどうなのだろう。ここがどうなのだろうと思ってやっている。非常に大事なことは形骸化が感じられるのであれば、もう既にかなりこのプロジェクトレベルが疲れ始めている。それはまた少し考えなければいけないテーマだと思います。そのままというのは、むしろデモンストレーションだと認めてはいけないと思います。

○西田教育委員長 ありがとうございます。それは声を出して言っているのですね。

○小貫悟氏 そうですね。デモンストレーションに見えるけれどもという。

○西田教育委員長 実践していることに対して疑問を投げかけるのは少々遠慮がありますので。

○小貫悟氏 それから、特別支援が必要な子のためにできる子が我慢していたらダメなのです。ですから、できる子もゆっくりな子も授業から成長するというのを、できるのか、そんなことというふうにチャレンジしようというのが、このセカンドチャレンジで、抽出時の研究授業として、この子に注目してみましようとするのですけれども、ゆっくりな子とよくできる子も日野市は、ほかの市はゆっくりな子ばかりに注目するという授業があるのですけれども、日野市はよくできる子もどんな表情で授業を受けているかをチェックしながらということの一つの研究報告としてやっていたりしますので、ぜひそういうところも見ていただいて、学力向上という問題と特別支援という問題は二律背反のものではなくてつながっているということ。

○西田教育委員長 ありがとうございます。

わくわくどきどきする授業についてですが、私自身も子供の頃、足が速くないので、ふだんは元気で飛び回っているのに、体育の時間は苦痛という経験をしました。

私は教員をしていましたが、わくわくどきどきするような体育の授業はできなかったと思っています。今、授業を見せていただいても、子供たちがわくわくどきどきしながら体育をしているかと言うと、もう少し、という感じもするのです。先生が先ほどおっしゃったように、教師はやらせ、子供はやらされるというという形がまだあるように思います。

私が気になっているのは、授業の始めの準備運動です。前に出たお子さんの「屈伸、1、2」と言う言葉に合わせて一斉にやっている姿をたまに見ます。もっと工夫していいのではないかと思います。自ら学び、共に学ぶ体育の授業がもっとあってほしいと思います。後でお話をお聞かせください。

先ほど先生が運動を好きになることが大切だと話されました。本当にそうだと思います。人はもっている運動能力が違いますから、他人との比較ではなくて、昨日の

自分と今日の自分はどうだったか、去年の自分とはどうか、どれだけ伸びたか、どれだけ自分ができるようになったか、どれだけ楽しんだか、などに気付くようにすれば、体育に自信が持て、運動が好きになるのではないかと思います。学校でいろいろ工夫して実践されていることですが。

時間が少ない中で、もう一つあってごめんなさい。今、日野市の大綱を皆で時間をかけて考えているところです。私は、小学生も中・高生も幼い子も、スポーツに親しむためには、もっと運動が気楽にできる環境が身近にあってよいと思っています。運動のクラブ活動に入っていれば、しっかり運動ができますが、そうでないとなかなかスポーツをする機会がありません。

私は外国映画が好きでよく見ましたが、街角の空き地や小さな公園で、若者たちがバスケットを楽しんでいるシーンが印象に残っています。現在、実際に公園の一角にバスケットゴールがあって若い人たちが集まって、楽しそうに運動をしている所もあります。

公園はとかく禁止事項や制約があります。当然、小さいお子さんやお年寄りのための安全な場所が必要ですが、開放して、若者や子供がボール投げ等の運動をしても良い場所があってもいいのではないかと思います。

そうすれば、子供たちの運動能力も高まるし、スポーツも好きになり、エネルギーも発散でき、人間関係も良くなり、楽しい時間が過ごせるのではないかと思います。のですがいかがでしょうか。

○梅澤秋久氏 お答えになるかどうかわかりませんが、1つ目のわくわくドキドキを誘発するために、私はアフォーダンスをというものを推進しています。アフォーダンスというのは、物と生物との関係性のことです。例えば体育館でエバーマットが真ん中にどーんと置いてあったら、間違いなく先生がいなければ、そこに飛び込む子が多いはず。暑い夏、青い空、青い海、多くの若者が波に向かって飛び込みます。人は物とか環境に誘発されて、事を起こします。そういう動きたくなるような物、あるいは環境をうまくデザインすることが大事かと思っています。跳び箱は硬いから嫌なのです。でも、やわらかくてウレタンで、ふわふわの高いものというのは今売っているのです。そういうものがあれば、そこで活動が行われるはず。あれを跳び越そうみたいな一つの型ではなく、高いところに飛び乗ろう、あるいは両手であそこの上に乗ってごらんなんてやっているうちに乗るだけではつまらなくなってしまうのです。同じものはつまらなくなるのです。

だから、できるかできないかのぎりぎりを楽しむために、もっと遠くまで跳ぼうとするのです。結果的に跳べるようになってしまう状況をつくってしまえば、いわゆる着手をした後、もっと遠くまで跳びたい。ふわふわの跳び箱よりもかたい木の跳び箱のほうがいいという形で、初めてそこで跳び箱というものが生きてくるはずなのです。でも、先生方は、恐らく跳び箱ありきで跳び箱をやるのです。学習指導要領でも高学年ぐらいからでいいのに、もうそれありきで低学年からやらせたりするのです。それでみんな嫌になってしまうのです。物から誘発して活動をデザインすることが重要か

と思います。

それが、最後の話とも関連してくるのですが、3 on 3 といつか、ストリートバスケットができる場所は大体ネットで囲われていて、よそと隔離された公園の一角です。あそこはそんな大したルールなんかはないのです。何となくボールと人がいると3 on 3、1対1でもいいのです。何となくゴールに入れられるか、入れられないかの競争を楽しむのです。場があることによって何となく活動が誘発され、でも、梅澤は下手だから、お前のところにもう一人入れてやるみたいな形で2対1が生まれたり、勝手なルールがそこで創出されて、自分たちで勝手につくり上げた活動場、バスケットっぽい活動が生まれていくと思うのです。そういうものというのは、勝手にルールがどんどん変わって、メンバーが勝手に変わってという運動、活動、スポーツっぽいものごとが行われるようになるとすごく平和だと私も思っています。環境が活動を誘発するのかなと思いつながら聞いていました。

準備運動はおっしゃるとおりです。あれも軍隊の名残なのです。運動会の準備運動でラジオ体操をやっていますね。あれは徒手体操ですから体力を高める運動です。何で準備運動に体力を高める運動を入れているのかと私は思うのですけれども、確かに一部柔軟性を高める要素は入っていますが、あれはもっと違ったことをやったほうがいとよく運動会を見ながら思っています。恐らく、熊さんのように四つんばいで動いてごらんとやるだけでハムストリングスが伸ばされるのです。反対側で動いてごらんとするだけでいろいろな筋肉が伸ばされたりするのです。遊びの中にそういう準備運動というのはたくさんあるはずなのです。それがもし体育館であるならば、それが広いマットの上であるならば、もし、それが芝生の公園の上であるならば、多分、いろいろな活動が誘発されてくるのかと思います。準備運動、いわゆる予備運動、バレーボールっぽい運動をするならば、それに近い動きを入れた遊びをぜひ先生方が入れられて工夫するといつと思っています。

最後の身体能力の話ですが、先生がおっしゃるとおりで、スポーツというのは勝ち負けばかりなので優劣関係になります。勝つた人は優越感、負けた人は劣等感を味わう。でも、そうすると間違いなく半分は楽しくて、半分はつまらない構図になってしまうのです。そうではなくて相対評価、先生がおっしゃるとおり、個人内評価に変えるべきだと思いつます。そこでの感情は有能感、能力がある感、同じ「ユウ」ですけれども、最初のもはすぐれている感なのです。でも、個人として能力がある感、有能感に変えることが何より重要かと思いつます。

以上です。

○西田教育委員長 ありがとうございます。

○大島企画部長 皆様、大分体温が上がってきたところなのですけれども、申しわけございません。予定の時間を過ぎてしまいました。きょうは小貫先生、梅澤先生、ありがとうございます。ここで意見交換を閉めさせていただきたいと思いつます。

それでは、今後のこと等につきまして、事務局から。

先生方、もうしばらくおつき合いつください。

○仁賀田企画調整課長 貴重な意見交換となりました。ありがとうございました。

続いて、2の今後のスケジュールについて御説明させていただきます。本日の意見交換を踏まえて、大綱の最終案に向けて進めていきたいと思っております。

次回は、来年2月24日を予定したいと思っておりますのでよろしくお願いをいたします。

それでは、市長にお返ししたいと思います。

○大坪市長 改めまして、本日はお忙しい中をお二人の先生方、本当にありがとうございました。素晴らしい御講演をいただきましたし、遅い時間までおつき合いいただき、貴重なサジェスチョン、アドバイスをいただきました。

これからきょうの意見交換、そして、教えていただいたことを生かして、日野らしい教育大綱をつくり上げていきたいと思っておりますので本当にありがとうございました。

本日、予定した議題は全て終了いたしました。大変お疲れさまでした。

閉会 20時30分